
蒼影 短編

十浦 圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼影 短編

【Nコード】

N6410X

【作者名】

十浦 圭

【あらすじ】

連載中の「蒼影」の短編になります。連載を読まなくても大丈夫なように気を付けてはいますが、稀に分かりにくい部分があるかもしれないです。

タイトルの？が「まどろみ」→「墓荒らし」、？が「墓荒らし」→「カーテンコール」、？が「カーテンコール」以降、？がそれ以外の時間軸になっています。

？ 月だけが知っている

キイイインという澄んだ音と同時に、短刀が弾き飛ばされた。綺麗な弧を描いて飛んだそれよりも先に、短刀の持ち主がドオツと地に伏せる。

倒れた男の意識がないのを確認して隊上がると、ゼロルはまた静かに闇にまぎれた。

何人倒しただろう。

無人の酒場の影で、やや乱れた息を整える。

遠くでパラパラ、と軽い音がした。マシンガンまで持ち出している。先日から期間限定で仲間になった彼らの中にそんなものを使う人間はいなかったように思うから、おそらくあれは奴らのほうの獲物だろう。この街の住人はよっぽど自分たちの、彼の首が欲しいらしかった。

宴会が終わってから3時間。クルー全員の戦闘力を把握している訳ではないので断言はできないけれど、街の人口から考えてもそろそろ終わってもいい頃だろう。住人全員が賞金首だなんて、面倒な島もあったものだ。ため息をつきかけてふと、空を見上げた。月のない夜空は、地上のゴタゴタなどどこ吹く風といった風に澄まして広がっている。

「おい」

はっとして振り返る。

反射的に向けた銃口の前で、ローは呆れたような表情だった。

「随分と余裕だな」

「少々疲れたんです」

ゆっくりと銃を下す。口から出たそれは、我ながら言い訳めいて聞こえた。

ひよい、と肩をすくめて隣に並ぶローの動きを、目で追う。怪我は

していいらしい。予想通りというか、まあ、こんな連中にやられるような腕でないことは分かっていたのだけれど。

「今日は能力を使わないのか」

「混戦ですし」

一人なら使っていた、というニュアンスを漂わせてみると、隣に立つ男は若干面白そうな顔でこちらをむいた。

「用心深い奴は嫌いじゃねえ」

だからおまえを勧誘したんだしな、と続けた言葉に一瞬息がつまっただけ

「何がですか？」

動揺を抑えて答えた声は思ったよりさりと響いた。

「あの島で、俺達に囲まれたときに能力を使用しなかっただろう？事態を大事にしたくなかったというおまえの主張も違和感のあるものではなかったが」

もしそうなら今日使わないのはおかしい。俺達がおまえを認識できなくて何か困ることがあるか？姿が見えないんだから戦闘法を銃にこだわる必要もない、弾の無駄使いになるだけだ。だから流れ弾に氣を使う必要もない、俺達が戦う中をゆっくり、確実に倒していけばいい。なのにそれをしないのは、

「出来ないから、だろう？」

何か言い返そうとして顔を上げて、問うた彼の瞳が嬉しそうに笑っていて、試されたことに苛立ちすら感じなかった。事実として私は自分の能力の詳細を隠そうとした、彼らを完全に信用した訳ではないからだ。それは私にとっては当然のことで、信用してなかったという事実に対する罪悪感も、後ろめたさも、あいにくと私は持ち合わせていなかった。大体彼だって、私が彼らを十分に信用した訳ではないことなど知っていたのだ。

だからその時私が思ったのは、安っぽい不安や薄っぺらい謝罪の言葉なんかではなくて。

「分かっていたなら」

気を緩めれば笑みを作ってしまうような顔を引き締めて、ゆっくりと銃を握った腕を上げて。
聞かないでください、と。

彼の斜め後ろからこちらを狙っていた男を撃ち落とした。

月だけが知っている

（平然と笑う男に一瞬、惹かれたのは紛れもない事実）

？ 水面に写る月の影は

強いな、と彼は呟いた。

偉いねえ、と彼は笑った。

すごいですね、と彼女は目を丸くした。

それでも記憶の中の少女は、ただ泣いているだけだった。

「ゼロルはさあ、」

唐突にかけられた声にゼロルは顔を上げた。

まっすぐに向けられた視線に、真向かいに座った彼はどことなく気まずそうな顔をする。

「いや、その」

「なんですか？」

持っていたペンを置いて、傍らのホットミルクを一口含む。

声をかける気などなかったのだろう。先日から期間限定で仲間となつた彼らの一人、シャチと呼ばれる彼は、自分から声をかけた癖にうろつろと視線を彷徨わせていて。

「なんでもない、は無しで」

何なのか気になるでしょう、と逃げ道を封じてやれば、一瞬嫌そうな表情になった。

全くもって、正直なものだ。

そういう正直さは嫌いではないのだけれど。

「で、なんなんですか？」

「なんつつかほんとその容赦のなさとか、ゼロルって船長に似てるよな・・・」

「そう？」

あそこまで性格悪くないと思いますけど。

そう囁くゼロルに顔をひきつらせてそういう所だ！とシャチは叫んで「そうやって仕事してるのを見ると、ゼロルって偉いよな、って思っ

ただけ」

と、いささかきまり悪そうに言った。

偉い。

幼い頃からその形容詞を貰うことはわりかし多かったように思う。成長してからはさらに増えた。

女の身で旅をするなんて。きちんと生計を立てられるなんて。自身の能力を最大限に活かしている。頭が良い、自律心が強い。確かに自分は「そう」なのかもしれない。

一人で旅をして生計を立てて、能力を活かして自律心も強い。それでも。それが事実だったとしても。

心の中の過去の自分は、未だに泣き止まないままなのだ。

水面の写る月の影は

(どこか泣いてるようにも見えて)

？ 薄闇にとけた言葉

「ゼロル」

その声に、薄闇を含んだ空気が揺れたのが見えた気がした。

白い包帯。明かりを背に床に伸びた影。黒い靴。

視線をゆっくり滑らせて、彼の顔を見上げる。

その表情は逆光でゼロルからは見えなかった。

明かりのついていない医務室は、徐々に沈んでいく太陽に合わせて闇に包まれていく。

不自然な沈黙のあと、ベッドに寝ていた方の影が口を開いた。

「けが人は？」

「大方、治療は終わった」

「そう」

口を開きかけて、閉じて、そしてまた開きかけて。

視線は自然と、自身の右腕に巻かれた包帯の上を往復する。

「・・・シャチが撃たれたと思ったから、」

薄闇の中、白く浮かび上がる包帯。

「良かった」

赤。銃声。一瞬自分の中を駆け上った、焦り。

ゆっくりと、目を閉じた。

まだこの時間では、目を閉じた方が暗闇は深い。

「縫わなきゃならねえような怪我を負ったのは」

「お前だけだったからな」

なにも含まない、ただの声。

平坦なようで、深い。寒くてたまらない時にじわりと体に染み込む

アルコールのような。

「・・・そっか」

ゼロルはその声が好きだった。

約7割が吐息のような、自分の小さな返答に何か言ってくるだろう
と思ったのに、ローは黙ったままだった。

明かりもつけず。何も言わず。部屋に入ろうという素振りも見せな
い。

ただ、そこにいるだけ。

動かない空気に閉じたときと同じく、ゆっくりと目を開ける。

目に入るのはいつの間にか見慣れてしまった天井だった。

「寝とけ」と。

ふいに低い声がして、そして扉が静かに閉められた。

完全な暗闇になった部屋の中で、ローの最後の言葉が空気に溶けて
いく。

ゆっくりと遠ざかっていく足音。

苛立った時のそれでも、心配している時のそれでもないそのゆった
りとしたテンポが。

急に目の奥が温かくなってゼロルは目を閉じた。

まぶたの裏で反復される感情。

らしくもない焦り。飛び散る赤。自身が攻撃を受けた時よりも強く
感じた衝撃。

暗い部屋でおろされたままの手。部屋に入って来ようとしな足。
感情を含まない声。

右腕、自分の利き腕に、きつちりと美しく巻かれた、包帯。
喉の奥から笑い声が漏れた。

苦しいとか、怖いとか、嬉しいとか。その全てが今更だろうとか。
色々な言葉が頭を巡ったけれど、全部どうでもよくなった。

「やさし、すぎるでしょう……」

呟くのが、精いっぱい。

薄闇にとけた言葉

(それでもぐちやぐちなのにこれ以上私を揺さぶらないで)

？ 優しい絶望

あざわらう声が聞こえた、と思ったと同時に、ゼロルは能力を発動していた。

倒れている男たちを見下ろして、ゼロルは立っていた。

人通りのない裏道。汚れたレンガの舗装道のうえに、気を失って倒れた男が3人。

表通りの人々のざわめきが微かに聞こえてきて、ゼロルは小さく身じろぎした。

銃をゆっくり、そろそろとホルスターに戻す。

銃座で殴ってやった以上、男たちが今すぐ起きてくる心配はない。

もちろんゼロルもその事実を分かっていた。にもかかわらず、彼女の動作はとても静かで、まるで何かを起こすのを躊躇うかのような動きだった。

無感動に男たちを見下ろす。いつもならサイフを探すのに、今日はなんとなくそんな気になれない。

どうしてこの男たちを倒したのだろう。

考えないようにしていた疑問がぼこりと胸の内に浮かび、ゼロルは微かに顔を顰めた。

脳みその足りない男たちなど何処にでもいる。下品な声を下賤な言葉を、無視してやりすごすことなど、女の身で一人旅を続けてきたゼロルにとって、しごく簡単なことだった。

それが今回に限ってできなかったのは。再び男たちを見下ろして、そしてゼロルは思い切り眉間にしわを寄せて。ため息をついた。

恐らく、多分。自分が許せなかったのは、男たちが自分の胸のこのマークを馬鹿にしたことなのだろう。男の下世話な言葉や自分に向けられた罵倒など気にもならなかった。なのに、ただこのマークが、

彼らの誇りが汚されたというだけで、この自分が怒りにまかせて行動してしまった。

引き結んでいた口は、やがて自嘲の形に歪む。

世界を変えると宣言して、契約だけを交わして生きてきて。それだけが唯一の望みだった、はずなのに。

一体自分は、いつから誰かの誇りのためだけに動けるようになったのか。

応えなど自分にも分からなかった。

優しい絶望

（その感情が何なのか、私にはなにも分からない）

？ あなたが私の一番星

「きゅん」

「うるせえ」

すっかり酔って自分に絡んできた馬鹿を容赦なくカウンターに沈めて顔を上げたローは、ふと、ゼロルの姿が見えないことに気が付いた。

「ゼロル」

声をかけると、いつの間にか酒場の外でこちらに背を向け一人たたずんでいたゼロルは、普段より若干緩慢な動きで振り返った。振り向いた頬はこの寒いのにやや上気していて。

これはかなり飲んだな。

やや呆れた気分で声をかける。

「何やってんだ、阿呆」

「なに急に。失礼だなあ」

「この雪の中薄着でぼーっと立ってる奴に他に言つべき言葉があるのか」

自分の言葉に面白くなさそうな顔をしたのがなんだか気に入らなかった。酒場から勝手に取ってきた毛布を顔にぶつけてやると。

ももごと毛布を外してそれを確認したゼロルは、若干驚いたような表情になって

「ありがとう」

滅多に変わらないゼロルの表情が満面の笑みを浮かべた。

毛布で体をくるんだゼロルは、そのまま、先ほどまでと同じように空を見上げた。

こちらを気遣う様子もないので、仕方なく自分から隣へ並ぶ。

ローが隣に立ったのも特に気にせず、ゼロルは変わらずどこか楽し

そんな表情で空を見上げていた。

「何を見てんだ」

ゼロルにならって空を見上げながら尋ねるも、その答えは夜空を目にした瞬間に分かった。

「綺麗でしょう？」

嬉しそうな声にああ、とうなずく。ついでになんてお前が自慢してんだ、と突っ込んでおいた。

ゼロルが見ていたのは星だった。

グランドライン
偉大なる航路でさえ、滅多にお目にかかれないような、見事な星空がそこには広がっていた。

「すごいな」

「冬島だからなのかな」

「は？」

「冬島は気温が低くて空気が澄んでるから星が美しく見えるんだって」

「へえ」

「知らなかったの？めずらしい」

「うるせえな」

会話を交わしながらも視線は空に向けたままで。

「・・・あれは熊座だな」

「え。どれ？」

「あれ。あの、ひときわ明るい星の、右の」

「あ、あれ？」

「ああ。んの隣のが小熊座だ」

「おとめ座は？」

「あれは今は見えねえ。小熊の下のは時計だな、連なるようになってるのが薔薇」

「もしかして・・・」

「あ？」

「全部言えるの？」

「悪いのか」

隣に立つゼロルを見下ろして片眉を上げながら答えてみせると

「いや、なんか意外というか、可愛いね」

言つと同時に、唐突に腕を引き寄せられた。強引に顎に手をかけられ、唇にやわらかいものが触れて。

しばらくして解放されてから

「なに、急に」

思い切り睨みつけてやると、ローは至極楽しそうな笑みを浮かべた。どうやらスイッチが入ってしまったらしい。引き金は一体なんだつたのか。

とりあえず文句は言っておかなければ、とゼロルは口を開いた、その時に

「・・・あ」

「？ゼロル」

思わず漏れた声に、ローの表情は怪訝そうなそれになり、ゼロルが唐突に抱きついたせいで驚きのそれに変わった。

毛布が落ちてしまったらしい。背中にひんやりとした空気を感じたが、そのまま気にかけず暖かい彼の体を抱きしめる。

無性に楽しい気持ちになってローの顔を見上げた。

見上げた彼の目の中に映る星に笑って。

「つかまえた」

あなたが私の一番星

(酔いと夜と、そしてあなたが私を有頂天にするの)

title by 群青3m手前様

？ 僕を動かせるもの

なかなか感じのいい島だった、と、ゼロルは満足げに、たった今買ってきたばかりの荷物を自室のベッドの上に勢いよくおろした。

「みんなは酒場だったっけ？」

「うん！」

今日一日、ゼロルの買い物に付き合ってくれていたベポは、礼にとゼロルが買ってやったアイスクリームを美味しそうに舐めながら、元気よく答えた。一度船に荷物を降ろしてから、二人は残りのメンバーと合流する為に街の中心部へと向かっていた。ふうわりと柔らかない風と共に花弁が通り過ぎる。スピードには聞かなかったけどこは春島だろう。暖かい夕日と花の香りがやさしい。嬉しそうにアイスを食べるベポを少し見上げて、会話を続ける。

「ここはお酒が美味しいので有名なんだって」

「そうなの？」

「うん。まあ、ベポは飲まないからあまり気にしてなかったかもしれないけど」

お酒が美味しいところはたいていおつまみも美味しいよ、と言った言葉に、わあい、と嬉しそうな歓声が返ってきて、思わずゼロルは笑った。

島の中心街を抜けて、少し行ったところにその酒場はあった。すでに辺りはやや暗くなってきており、赤々と明かりを灯し美味しそうな匂いと楽しそうな歓声が漏れるその場所は、道を行く人々の目に魅力的に映る。自分だって例外ではない。女にしては酒が好きだという自覚はあった。

一歩足を踏み入れると、ふわっと強い、しかし上等な酒の匂いがし

て、期待からつついっつい頬がゆるむ。

「ほとんどうちのクルーが占めてるね」

と言っベポにそうだね、と返そうとして、
それが目に入った。

「あ・・・」

ベポの素直な反応が可愛いなと頭のどこかで思いながら、奥のカウンターで女にすり寄られたまま酒を飲むローの姿を眺める。

ああ、せっかく朝からいい気分だったのに。

「ゼロル・・・」

気遣わしげなベポの声に、肩をすくめて、私は店の奥を目指した。

「ねえ、二人で抜け出さない？」

カウンターについた肘に自身の胸を押し付けるようにして、その女はローに囁いた。真っ赤なドレスが目には痛い。

店の明かりに煌めくブロンドの髪も、組まれたなめらかで白い足も、一夜の相手としては、まあ、合格点。

だが。

「悪いな」

飲んでいたのがわりと強めの酒だったからだろう、普段より若干低めの声が出た。

「女がいるんだ」

こちらを見もせずにローが答えたことに、女は屈辱を覚えたらしい。一瞬ひきつった顔をなんとか立てなおして、皮肉げな笑みを浮かべた。

「一人の女に縛られるなんて、案外つまらない男ね」

「そうかもな。それでも俺の相手はあいつしか勤まらねえ」

クツと喉の奥で嗤って。女が話しかけてきてから初めて、ローは正面から彼女を見た。

「邪魔なんだよ。それ、どけろ」

言外に胸を指され、カアツと赤く染まった顔は、今度は隠しきれなかったらしい。隠すつもりもなかったのだろっ、女は激情のまま手を振り上げ、

次の瞬間びしょぬれになっていた。

啞然とする女の後ろに視線をやつて、ローは楽しげに、実に楽しげに声を投げかけた。

「遅かったな」

「気づいてたくせに」

答えたのは空のグラスを持ち、どこか不機嫌そうな雰囲気の中のゼロルだった。

「機嫌なおせ」

「無理」

ローの隣で三杯目をあけながら、ゼロルは未だ無表情のままだった。

「大体、あのくらい自分でどうにかできたでしょ」

「追い払おうとしたところでおまえが割り込んできたんだ」

「よく言うわ、店に入った瞬間から気づいてたくせに」

それなりに強めのカクテルをクイツと飲み干したゼロルの声はどことなく固い。

あまり根に持つ、ということのないゼロルの珍しい姿に、ローは器用に片眉を上げた。

「妬いてるのか？」

「それなりに。悪い？」

「悪くはない」

むしろいい気分だな、とローは笑った。

その返答さえもゼロルの気に入らなかった、らしい。せつかくの美味いお酒なのに、と嘆息しながらも視線は前を向いたまま。

淡泊な性格の彼女を、ここまで不機嫌にさせることができるのは自分だけ、という事実にはそれなりに優越感も満足感も感じるが、これ以上機嫌を傾けられるのも面倒だ。

ローは艶めいた、先ほどゼロルに向けた悪戯っぽいものとはまた違った、しかし十分魅力的な笑顔でゼロルに囁いた。

「どうしたら、機嫌がなおる？」

ちろり、とローを見たゼロルの顔には羞恥の色はなく、

しかし優しいその声音に、ひとつため息をついて、ローの思惑に乗ることに決めたようだった。

「ローが、」

どこか呆れた、諦めたような目で。それでもその瞳の奥に、ほんの少しの喜色を滲ませて、

「ここで、キスしてくれたら」

あまりないゼロルの我儘を、しかし予想していたローはそのままゆっくりと唇をふさぐ。

ふわりと、甘い酒の匂いがした。

僕を動かせるもの

（私を揺るがせるのはあなただけ、あなたを揺るがせるのも私だけ）

t i t l e b y 群青 3 m 手前様

？ 好きなもの

雪が、降っている。

窓から見えたその景色に、ゼロルは立ち上がった。

甲板に出ると、男性クルーが総出で雪かきをしているところだった。
「ゼロル！」

「おつかれ。こんなことしてたんだ」

ちょうど顔を上げ、目が合ったシャチにそう答える。

「言ってくればよかったのに」

「ばか、おまえに手伝わせられるかよ。船長になんて言われるか」
「そう？」

気にしないと思うけど。と言った自分の声がどこか不満げで、自分で驚く。

「ゼロルは雪が好きただけだろう」

ペンギンの苦笑交じりの声に、納得する。確かに、自分は雪がとも好きだ。雪かきという名目で雪を眺めていられるのは、それなりに羨ましい気がする。

「だって綺麗じゃない」

「ゼロルってどこの出身だっけ？」

「ウェストブル
西の海」

「雪降らないのかよ？」

「いや、降るけど、北の海^{ノース}ほどではないよ。私の出身の島は比較的暖かい気候だったし」

「そうなんだあ」

「だからそんなこと言えるんだよ。俺ら北の海^{ノース}出身には、雪はある意味凶器だぜ、凶器。邪魔だし、危ないし」

綺麗つつー発想がまずないな。と真面目くさってシャチが言った。
「手を止めるな」

ペンギンに小突かれ、いдаあつと声を上げている。

「雪が怖いってことくらいは知ってはいるけど、」

経験がないんだから実感が湧かないのも無理はないと思う。

呟いて、ぼうつと、降る雪を見上げた。

ひらひら。ひらひら。舞い散る雪は綺麗で、儂くて、そしてどこか怖くもある。

みんなが言うような怖さじゃなくて、どこかへ吸い込まれそうな、連れて行かれそうな。この世界に比べればお前なんか塵のような存在だと言われているようで、

半開きだった口に、ひとひら、雪が落ちた。

「ゼロル」

ふいにかけられた声に、我に返る。

「もういいだろう。風邪をひくぞ」

気を使ってくれたペンギンに頷いて答えようとして、

「

開いた口から、声は出なかった。

「声やけだな」

大変だ大変だと押しかけたクルーに囲まれ、俺の前の椅子に座ったゼロルは、きよとん、と目を瞬いた。

こえやけ?、と声のでないまま口が動く。

「雪を食っただろう」

心配そうなクルーの視線の先で、ああ、とゼロルはあくまで冷静にうなづく。

「グランドライン偉大なる航路ではたまにあるらしい。暖かいものを飲めば治る」

「え、それだけで治るんすか!？」

「ああ」

答えるとゼロル以外の人間がはあーと安堵のため息をついた。何か持ってくるよ、とジャックが医務室を出ていき、残ったやつらも心配させるなとかなんとかひとしきり騒いで出て行く。雪かきの続

きをするらしい。残されたゼロルは、ぼうつと、窓の外を眺めていた。

「そんなに、」

考えていたことが不意に口について出て、自分のことながら驚く。夢見るようだったゼロルの目が疑問をたたえて俺の方を向いた。

「・・・そんなに、雪が好きなのか」

別段、言うつもりもなかった言葉を、ゆっくり吐き出すとゼロルはゆっくりと首を傾げ、

そう見える？と声の出ないまま聞き返した。

「自覚ないのか」

どうだろう

ぱくぱくと大きく口を動かしたまま、
たしかにゆきはすきだけど、

「何だつて？」

後半の部分を読み取り損ねて聞き返す。ゼロルはどことなく嬉しそうな表情になって再度口を開いた。

だから

ゼロルの言葉を遮るようなタイミングでガラララッと勢いよく引き戸が開き、振り返ると湯気の出るマグカップを持ったジャックが立っていた。

「お待たせ、ラム入り紅茶にしたけど、良かったかな」

俺からジャックへ移ったゼロルの目が嬉しそうな色を見せた。存外、ゼロルは酒が好きである。それこそ自覚はあまりないようだ。

ジャックから紅茶を受け取って、ふ、と少し息をかけるとゼロルはカップに口をつける。

うまそうにこく、こく、と飲み干して、は、と息をつくと彼女は

「、ごちそうさま」

と微笑んだ。

好きなもの

(世界で一番あなたが好きです)

？ エデン

いつもより早めに設定してあった目覚ましを止めて。身支度を整えて、部屋を出て。見張り台へと向かったゼロルは、甲板に自身の船長であり恋人である男の影を見つけた。

「ロー？」

ふいにかけた言葉にローは反応しなかった。扉を開ける音が、もしかしたら通路を歩く音も聞こえていたのかもしれない。まだ誰もいない甲板でどこか遠くを見ている彼の隣に立つ。

「何を」

見てるの、と続けようとしてゼロルはその答えに気が付いた。海。

彼は海を見ている。

「・・・見張りか」

「うん。ローは徹夜？」

「いや。目が覚めたただけだ」

「こんなに早く？ 珍しい」

「偶にはそんなこともある」

決して目を合わせず、続ける会話は心地よくて。朝の混じり気のない空気に、ゆるゆると動く風、右隣から降ってくる低い声。

見ているものは、同じ。

「海を、最初に女性に例えたのは誰なのかな」

ふと思った思考の端から言葉が落ちる。

「さあな」

「不思議だよな。大地や空は父に例えられることもあるのに」

私たちの命を握る海。一度懐に入れば力も意思も奪うくせに、それでも私たちを誘って。

「・・・海を、見ていたんでしょ？」

「そうだと言ったら？」

「別に。聞いてみただけ」

「嫉妬したのか？」

「まさか」

からかうような彼の声音に、ゼロルも笑みを含んで返した。

「大体、どちらに嫉妬すればいいというの」

エ
デ
ン

（しにたいくらい愛してて、ころされるくらい愛されて）

？ 一番上手に甘やかす人

「・・・ロー？」

投げかけた言葉に返ってきたのはかすかなうめき声だった。

眠っているのかと思って近づいたが、どうやら起きていたらしい。

右手を目の上に載せてベッドに寝ているローは、億劫そうにその視線をこちらに向けた。普段からあまりいいとは言えない顔色が、熱のせいでさらにひどいものになっている。

「気分は？」

「・・・最悪だ」

かすれた声を聞きながら、額の布を取り上げて持ってきた水に浸す。チャプン・・・という水の音にローがゆっくりと目を閉じた。

薄暗い室内に、水のこぼれる音と、彼の吐く息の音だけが響く。しばらくた水がはねてデスクと袖を濡らした。

「・・・つらい？」

布を額に戻しながら、辛そうなローの様子に思わず尋ねた。意味のない質問。だけど、こんなに弱ったローなんて見たこともなかった。こうして目の前にするまで想像もできなかったと言えきつと、一体俺を何だと思ってるんだとかなんとか、文句を言うだろうけど。

「ただの風邪だ」

「ほんとに？」

「おまえも風邪だつて言っただろ」

「それはそうだけど」

私は医者じゃないし、と言えば俺は医者だ、と返される。それはそうだけど、と立ち上がりながらもう一度呟いて、少しずれていた窓のカーテンをきっちりと閉めなおす。

「言いたいことがあるならはっきり言え」

振り向くと、ローがはっきりとした視線でこちらを見つめていた。

視線の強さは相変わらずなのに、顔色は土気色で目はやや充血している。ゆつくりと、自分の眉が寄ったのがわかった。

「心配なの」

言うつもりなんてなかった言葉が、ほろりと口から床へ落ちた。

「風邪だなんて分かっているけど。大丈夫だって、分かっているけれど」

なんだか後ろめたくて、自然と視線はローからはずれた。らしくない。そんなことは自分でも分かっているけれど、

「偉大なる航路だし、なにかあったらって思っちゃって」

もしもあなたを、失ったら

ぐしゃりと、自分の表情が崩れたのが分かった。どんな顔をしているのかは分からないけれど、無表情を保てなかったという事実がどことなく悔しい。ローが自分を凝視しているのを感じた。全くもって、らしくない。自分らしくもない。本当なら呆れたため息の一つでもついて、医者の不養生ね、くらいのことは言っているはずなのに、なのに、それでも、頭で理解できているのに、感情がそれに追い付かない。

僅かに沈黙が落ちて、そして唐突に、脇に垂らしていた手を強くひかれた。全く予想していなかった動作に、ろくに反応もできずにベツド、ローの脇へ引き倒される。

「ちょ、とロー、」

「うるさい」

強引に口をふさがれ、舌を入れられる。ひどく熱いそれに感じるどころではなく、私は目も閉じずにローを睨んだ。しばらくして解放されて、身を起こしても睨んだまま、

「・・・どういうつもり？」

ようやく出た言葉は我ながら苦味をたっぷり含んでいた。というか、苦味しかない。

「からかった？」

「まさか」

答えたローの表情はどこか楽しげだった。あんなに、熱があるくせに。

歪んだままの私の顔にすつとローが指をすべらせる。普段は私より少し低いぐらいの体温なのに、今日は信じられないほど熱い。そつと自分の手を添えた。

「今、キスしたろ」

「・・・それが？」

意図が読めずに出した声は訝しげなものになった。その響きにローはくく、と喉で笑って

「風邪は人にうつせば早く治るんだとよ」

投げかけられた予想外の言葉に、唇を開いたまま固まって。少しして、頬に添えられていた彼の手をゆっくり握りこんで、

「・・・それだと、次は私が倒れるってことになるんだけど」

「心配すんな、俺が看病してやる」

「・・・大体、医者のかせに非科学的」

答えた私の声はかすれていて、笑ったローの瞳はどこまでも優しくて。

愛しい、ってこういう気持ちのことを言うんだろうな、と思った。

（そつやって素直じゃない私のことを、
一番上手に甘やかすひと

t i t t l e b y 群青3m手前様

？ 狂人たちのラヴソング

「い、た・・・」

つうつ、と血を流す頬の傷に手を当てて、ゼロルは顔をしかめた。

襲われたのは一人で街をふらふら歩いていた時だった。酔っ払いの集団に囲まれて、

（油断してたつもりはなかったのだけど）

能力を使わなかったのが判断ミスだったことは認めざるをえない。もちろん全員返り討ちにしてやったものの、一太刀も浴びる気はなかったのに。事実こうして傷を、例えばすり傷でも負わされてしまったのだ。誰もいない医務室で一人ゴソゴソとガーゼを探す。あった、と見つけたところで、唐突に後ろから声がかかった。

「ゼロル」

「・・・ロー」

ゆっくりと振り返ると、血の匂いに気づいていたのだろう、面白くなさそうな顔をしたローが立っていた。

「誰にやられた」

「一般人。でも返り討ちにしたし」

「当たり前だ」

貸せ、と、入ってきたローにガーゼを奪われて、ゼロルは椅子に腰を下ろした。

体を傾けた拍子にスカートにぱた、と血がおちて、眉が寄る。

「顔上げる」

「った、」

冷たく消毒液で濡れたガーゼを押し当てられて小さく声が漏れた。ぐいぐいと傷をなぞるローの指は、普段のそれより大分荒っぽい。「痛い、んだけど」

呟いた声にも、上げた視線にも、返ってきたのは沈黙だった。ゆる

く目を伏せる。

何故彼の機嫌が悪いのなんて分かりきっていることだった。確かに、夜、勝手に一人でふらふら歩いて、怪我をして帰ってきた自分が悪い。悪かったけど。・・・もう起こってしまったことなのだからどうしようもないのだし。それより今は反省なんかするより、この男の機嫌をどうにかする方が自分にとっての優先事項が先だった。

「・・・好きで怪我したわけじゃないんだけど」

若干の後ろめたさから、声には自然、勢いはない。

「他には」

「顔だけ」

上から降ってきた低い声に、ああ、怒ってるなあ、とゼロルが嘆息した次の瞬間、顎に手を掛けられ上を向かされた。

「よりによつて顔に傷つけられやがって」

息がかかる程迫ったローの顔に、目を瞬く。

「ゼロル、」

声と同時にぼわつとあたたかい息を感じた。動くローの唇が時折、唇をかすめて。

「俺以外の野郎に傷をつけられるな」
つて言つたよな？

囁く息が生温かくてどこか気持ち悪い。

「そんなの、無理に決まってるでしょう」

あくまで冷静にゼロルは答える。いつのまにか手首をつかまれている。強い力ではないのに、試しに動かしてみてもびくともしない。

「ローだって、そんなの分かって言つたんでしょ」

でも嫌な気はしなかった。綱渡りのような。ギリギリの上を渡る駆け引きは、

相手がローなら、嫌いじゃない。

「そんなんで、」

この先、私が腕とか切り落とされたらローはどうするの？

ふと湧いた疑問を囁いた。無論そんなドジを踏む気は毛頭ないけれど。

顔にかすり傷を負わされたくらいでここまで激怒するこの男は、自分が体の一部を失ったら、一体どんな反応を見せるのだろう。

一瞬虚を突かれたような顔になったローは

「簡単だ」

しかしすぐに笑みを浮かべる。

「誰かの腕を切り落として、すぐにお前に縫い付けてやる」

「・・・それは、有難いことで」

冗談などではなく、それを真剣に、本気で言った彼を、狂ってると、そう評するのはそれこそ簡単なことだけだ。

そっと合わさった唇にゼロルは思う。

それを嬉しいと感じる自分もまた、彼の同類なのだろう。

狂人たちのラヴソング

（あいしてるあいしてるあいしてると歌う私たち）

？ 視線の先に、君がいるなら

「何か欲しいものとか、ある？」

背中からかけられた言葉はあまりに唐突で、一瞬ローは反応を返せなかった。

「・・・なんだ、急に」

振り返り、僅かの沈黙の後に返した返事は、我ながら怪訝そうな、訝しげなものだった。

質問の意図が読めない。と言うか、そもそもこうしてゼロルが夜中に自分の部屋を訪ねてきたことこそが、かなり珍しいことなのである。

振り返って、置いた腕の重みに、椅子の背もたれがぎし、と小さく呻く。

ベッドに浅く腰掛けてローを、もっとも正確には先ほどまで向けられていたローの背中を、見つめていたゼロルは、しかしそんなローの声音にも顔色一つ変えずに、首をかしげた。

「急っていうか・・・プレゼント、何か欲しいものがあるならそれがいいかと思つて」

「プレゼント？」

当然のように返された言葉にますます不審気な声が出て、

「ああ、」

そしてローはその理由に思い当たった。

「誕生日か」

「なに、忘れてたの？」

ローらしいけど。と呆れた声は聞かなかったことにする。

「お前らしいな」

「何が？」

「そうやって隠す気もなくあっさり自分の意図をばらしちまうとこ

る」

ベポやジョーカーがそわそわしていたのを思い出す。気になったものの、それが大して大事になりそうもなかったので放置していたのだが。

「普通隠そうとするだろ」

「だって」

ゼロルはどこか不満気な表情になった。

「隠しても絶対見破っちゃうじゃない」

「買い被りだ」

「そんなことない」

あつさりばれるくらいなら最初から隠さないことにしたの、と肩をすくめたゼロルにローは苦笑する。

「で、直接聞きに来たのか？」

「ベポの前で聞いたら怒られちゃうし」

「なんでもいい」

再び机に向き直りながら答える。

「何でもって・・・それじゃ聞いた意味がないんだけど、」

なんにもないの？と追いかけてきた言葉に、ああ、一つ言い忘れていたな、と首だけ振り返った。

「お前の選んだものなら、なんでも」

視線の先に、君がいるなら

（他にはなんにも要らないと言えば、お前はどんな顔をするだろう）

title by 群青3m手前様

？ 百合の咲く季節に

空気が揺れた。

白く冷たい朝靄の中で遠ざかっていく島を、誰もいない甲板で一人、ゼロルは見送った。

「何してる」

後ろから投げかけられた言葉は突然で、ゼロルはビクリと肩を揺らして振り返った。

「ロー、」

「何してんだ？」

驚いた、と呟いたゼロルに並びながらローは先ほどまで彼女が見ていた方向へ目をやる。遠ざかっていく島は自分たちが3日前に上陸し、たった今出航した秋島だ。

「あの島になんかあったのか」

「別にそういう訳じゃないけど」

「何もないのに突っ立ってた、と」

この寒い秋霧の中で

呆れたようなローの視線にゼロルは軽く肩をすくめる。

「なんかっていうか、言ってなかったっけ」

「何をだ」

「あの島、ちょっと故郷に似てたの」

特別な色を込めずに告げられたその言葉に。ローも特に反応せずに言葉を返した。

「秋島だったのか？」

「さあ、どうだっただろう。分かんない」

「そうか」

「やっぱり海の上は寒いね」

「そんな恰好してるお前が悪い」

「島の上ではちょうど良かったのよ」

寒い、と呟いて腕を組んだゼロルを、ローは後ろから抱きしめた。前に回した手をゼロルの冷たい手が握る。

「これって慰め？」

「そう思うか？」

「ん、確率は半々でしょう？ローは私には甘いし」

「要らないなら、除けるぞ」

「それとこれとは、別」

回された腕を抱き込むゼロルの声音は、相変わらずいつもの色のままで。

「百合の花が沢山咲いてた」

もう見えなくなった島の方へ視線を向けたまま、ぽつりとゼロルが呟いた。

「出航の前にペポと摘んできたの。今、船長室に飾ってあるから」

「残ってたかったか？」

あの島に。

答えの分かりきった質問を、腕の中に納まった自分の船員に問いかける。

「まさか」

返答は笑いさえ混じっていて。

それでも。抱き締めた手が未だ振りほどかれないのならば。

「もう少し待て」

ローの言葉の意図が読めなかったのだろう、腕の中のゼロルが首をひねってこちらを振り返った。

降ってきた言葉の意味がよく呑み込めなくて、ゼロルは自分を抱きしめている男を見上げた。普段なら自分より低い体温も、冷気に晒され続けた自分には暖かくて離れがたくて、体を捻ったせいで少々無理な体制になったものの、回された腕を放すことはしない。明らかに会話の流れからそれで意図の読めない発言をした自分の恋人は、

どこか優しい色の目をしていて。

「・・・どういう意味？」

首をかしげて呟いた自分の耳元に顔を寄せて、彼は低くささやいた。
「世界を一周してきたら、また連れて来てやるさ」

百合の咲く季節に

（また来ようと囁く彼に、どれだけ私に甘いのだろうと思わず笑みをこぼした）

t i t l e b y 群青3m手前さん

？ きっと、もう届かないけれど（前書き）

死ネタです。もしこうなったら、というお話なので実際に連載で登場人物が死ぬことはありません。

？　きっと、もう届かないけれど

視界がだんだん白っぽくなっていく。

遠くなつていく彼を眺めながら、小説のシーンなんかはやっぱり想像でしかないんだなあ、と、場違いな思いが胸をよぎった。

ぐ、と体が持ち上げられるを感じた。重いまぶたを持ち上げる。

意識しないと目を開けていられないなんて状態は初めてかもしれない。ゆるゆると上げた視線の先には、一切の表情を削ぎ落して私を見つめるローが、いた。

「・・・痛むか」

「ん、」

ローが声を出すとその振動が抱えられてる頭に伝わってきて、笑みがこぼれた。大体、痛いかって、痛いに決まってるだろう、お腹に穴があいてるんだから。

「・・・、口、お」

うまく声が出ない。空気を押し出すたびに喉がぴりぴりと痛んだ。こんな思いをしてるのに、息はなかなか音にならない。

「なんだ」

相変わらずの無表情で、でも何気なくローは答えた。まるで通路ですれ違つて、ちよつと呼び止められた時のような。出航時間を尋ねた時のような。何気ない、気軽さ。

彼はいつだって、そう、こんな時まで、私の求めるものを完全に分かっているのだ。

「わ、たしつは、、、だめ、だった、けど」

世界を変えることなく、変わった世界を見ることなく逝つてしまうけど。

「・・・ろお、は、かい、」

「分かった」

ひゅう、という音が混じって、すぐにローが口を挟んだ。その素早さに、また笑う。実際の表情は、どうなっているかは分からないけど。

「大体おまえに言われなくても分かってるんだよ」

「おまえが生きていようがいまいが」

「おれが海賊王になる事実は変わらねえ」

私のいちばん欲しい言葉をくれるローに、やさしいなあ、と思う。

すぎ、だなあ、とたつぷり5秒かけてそう、思った。

もう自分の手も足も体もなにも感じられなくて。遠くなっていく音。白くなっていく世界。重くなっていくまぶたを最後の力で押しとどめて、

さいごに、ひとこと、だけ。

「ロ、」

私の耳がおかしいのか、それとも本当にそれだけの声しか出てないのか。囁くというのもおこがましいような声量で。

「・・・ありがとう」

そして私は、目を閉じる寸前、初めてローの涙を目にした。

きつと、もう届かないけれど

（愛してくれて、ありがとう）

？ 白河夜船

・時雨に濡れた目見^{まみ}はみな夢^{しぐれ}

なんの前兆も前触れもなく、ふ、と意識が覚醒するのをゼロルは感じた。

おもたいまぶたをゆっくり持ち上げる。けれど瞳に映るのは、何の変哲もない自室の様子で。

いつもと同じく遠くで響いている船のエンジン音。静寂に包まれた部屋。

一体何が自分の眠りを妨げたのか。その答えを得ることなく、睡魔がおしよせてきて、ゼロルもそれに逆らわず、再びゆるゆるとまぶたを閉じた。

自分の眈^{まなじり}を濡らすそれに、最後まで気が付かないままです。

（かなしい？かなしい？）

・ライラック色の舟を漕いでた

こつくり、と。まるでお手本のようにゼロルが綺麗に船を漕いでいた。

ペンを握ったままの右手は宙に浮いたまま。机においた左手も微動だにせず。絶妙なバランスを保ちながらも、かくり、と首が落ちそうになり・・・そしてまた持ち直す。

それはそれは見事な、まさにこれこそ！と言いたくなるほど見事なゼロルの居眠りに、逆に声を掛けずらいのも分かるような気がする。初めは面白がって見ていたものの、あまりにゼロルが起きないため

に自分に泣きついてきたジョーカーと、彼の言葉が正しいのなら眠り始めてもう40分はたつというゼロルを見て、ペンギンは呆れのため息を吐いた。

（ほら、起きろゼロル う、うう？）

・孵ったばかりの雛鳥のように

ハートの海賊団の船長、トラファルガー・ローは、とにかく朝に弱い。低血圧というのもあるのだらう、誰も起こさなければ彼が部屋から出てくるのは昼過ぎになるし、誰かが起こしに言った場合、起きてきた我らが船長の機嫌は底辺を渦巻くこととなる・・・もし起こせたとしたら、の話だが。

対して、彼の恋人であり、ハートの海賊団の船員でもあるランクライト・ゼロルは、朝に強かった。どちらかというとなれば意志が強いというのかもしれない。彼女がこの船に乗ってしばらくしても、彼女の寝坊した姿や、あまつさえ寝ぼけた顔など見た者はいなかった。その日までは。

「・・・ゼロル？」

ふらりと食堂にあらわれると同時に、机につっぱして動かなくなつた彼女に、最初に声をかけたのは彼女と最も仲が良いとも言えるベポだった。

数日部屋に閉じこもりつきりで、やっと出てきたと思えばこれである。気にはなるものの、どことなく負のオーラを出しているゼロルになかなか話しかける者はなく。

「・・・なに」

さらに、ふせたまま返された声はくぐもっているだけでなく明らかに不機嫌そう。

珍しいこともあるものだ、とおろおろし始めたベポやジョーカーによそに、他の船員は顔を見合わせた。

結局、後日分かった事実では、あの日ゼロルは小説の執筆で4徹だった、ということだった。だったら大人しく寝ていればよかったものを、コーヒーと軽食のみの日々にうんざりしていた彼女はそのまま食堂の匂いにつられてふらふらと出てきて。しかし食堂に到くと同時にそのまま力尽きた。

起きて来たローに担がれて部屋に連れ戻されたゼロルは、その日の午後にはいつも通りの姿に戻っていたのだが。

ローが来る前にゼロルがまき散らした不機嫌オーラと、ゼロルを担ぎ上げたところをキャプテンに見つかってシャチがバラバラにされたことも含めて。船員の間では寝ぼけたゼロルに手を出すべからず、という新しい訓戒が出来たのだった。

（状況限定眠り姫）

・別れ路を往く朝も知らず^{あした}

これは夢だ、とゼロルは立ち尽くしたままで思った。

よく晴れた青空に海の音。日の光を浴びながら、木々は空へと高くのびていて。

見慣れたその風景の奥には廃墟と化した村が、あるはず、なのに。立ち並ぶ家々。ざわざわと人の気配までする。

懐かしさで胸が塞がりそうになる。

これは夢だ。夢なのに。

なんでこんなにも嬉しいんだろう。

目が覚めれば消えてしまうことは分かりきっていて、目が覚めた後

に襲い来るであろう喪失感も予測できていて。
なのにこんなにも嬉しいなんて、反則だと思う。
例えば後でどんな思いをしても、自分はもう一度この夢を望んでしま
うだろうと。

立ち尽くしたまま、ゼロルは両手で顔を覆った。

（懐かしくて懐かしくて懐かしくて消えてしまいたい）

・夜風は体を冷やすから

宴を離れてゼロルはひとりで海を見ていた。

「ゼロル」

「ロー」

後ろからローの声がして、その声の近さにゼロルは軽く驚いた。

ふり返ったゼロルを見たローは顔を顰めて

「・・・冷えるぞ」

「平気」

きつと他の言葉を飲み込んで言ったであろう言葉に、優しさに甘え
ることにする。

「・・・ローは私に甘いね」

「冷たくして欲しいのか？」

「嫌よ、だってそれ冗談じゃないでしょ」

「当然だ」

会話をしながらローはゆっくりとゼロルの隣に並んで、
握られた手の暖かさに、ゼロルはひっそりと胸の内であつた。

私はこんなに幸せだと。

ごめんなさい、ありがとう、と。

声に出さずに呟いた。

(ふわりと風は何も答えず)

・踏み入れられぬ夢の通路

ローは黙って、眠るゼロルの脇に立ち尽くしていた。
う、と声を上げるゼロルを見つめ、しかし起こそうとする気配はない。

うなされているのだろう、く、と眉間にしわを寄せてゼロルはもう一度うなり、

「レヴァ・・・」

呟いたそれは誰の名なのか。
寝苦しうに一度首をふる。その拍子に顔にかかった髪をそつと長い指でよけさせてやる。

それでもゼロルを起こすことはせずに。

ローはそつと、その額に口づけた。

(どうぞ。どうぞ、よい夢を)

・眠れよ眠れ やすらかに

眠らないの？

眠ったと思っていたゼロルからふいに声をかけられて、ローは背後の存在を振り返った。

うつぶせで枕を抱いて、ゼロルはどこか眠そうな表情でベッドに腰かけているローを見つめていた。

「寝ないのか」

「それは私がいまローに聞いたことなんだけど」

ふと思い立って、彼女の髪に触れる。指で梳くとサラサラと首筋を滑り落ちた。ゼロルが軽く首をすくめる。

「ローは、夢をみたりする？」

「さあ。おまえは」

「たまに、ならみる。起きたら忘れてるけど」

「ふん」

「どうでもいい？」

「ああ」

そんなかおしてる、と囁いてゼロルは目を細めた。枕を抱く手に力を入れる。

「寝ろ」

「そうね」

ローも寝たら、と最後に呟いてゼロルは目を閉じた。

（とある夜、いつもの会話）

t i t l e b y わたしの知るかぎりでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6410x/>

蒼影 短編

2011年11月10日20時52分発行